



ピリピ人への手紙

私にとって生きることはキリスト

PART TWO

 **GraceCity**
Church Nagoya

目次

- I. 使い方
- II. はじめに
- III. ピリピ人への手紙 2:19-30 → テモテとエパフロディト
- IV. ピリピ人への手紙 3:1-7 → キリストへの信仰による義
- V. ピリピ人への手紙 3:8-11 → 完全な満たしがある
- VI. ピリピ人への手紙 3:12-15 → 目標に向かい身を伸ばす
- VII. ピリピ人への手紙 3:16-21 → 倣う
- VIII. ピリピ人への手紙 4:1-9 → 励ましの言葉
- IX. ピリピ人への手紙 4:10-20 → 神の与える備え

使い方

グレイシティチャーチではC.O.M.A. (Context = 文脈、Observation = 観察、Meaning = 意味、Application = 適用) の方法を用いています。この方法を持って聖書箇所に取り組んでいきましょう。私たちは理論に焦点を当てた「議論のための質問」を「応答するための質問」（参加者が聖書箇所の中心テーマと個人的に対話することを求める質問）に置き換えることが適切だと考えています。

文脈 →

1. 周囲の節、段落、章、出来事などに注意を払い、読んでいる箇所が、聖書の中の特定の書物の文脈にどのように当てはまるかを確認してください。
2. この箇所が聖書全体の大きなストーリーにどのように当てはまるのか、つまり、神がイエス・キリストを通してどのように人々を救い、神の御国でご自身の支配のもとに生きていくようにしたか、に注目してください。

観察と意味 →

3. 聖書本文を注意深く観察しましょう。接続ワード（例: 「～なので」「もし」「ですから」など）、繰り返し、対話、物語、旧約聖書の引用などの詳細に目を留めましょう。

4. 聖書本文の意味を理解するためには、著者の目的や意図（聖書の著者はなぜこれを書いているのか？）を見極める必要があります。
5. 手助けとなる質問の例：
 - ▶ 誰が、誰に向けて書いていますか？
 - ▶ 著者と読者の状況はどうでしたか？
 - ▶ 取り組むべき問題があり、そちらへ目を向けるようにと促されていますか？
 - ▶ 繰り返されるテーマや、すべてをまとめている一つの主題はありますか？

適応 →

6. 神のことばを心に適用しましょう。「心」に関する良い質問をすることで、単に状況や行動に対処することの先へと進みましょう。例えば、「なぜ私たちはこうするのでしょうか？」「私たちは本当のところ何を望んでいるのでしょうか？」
7. 常に福音を適用に結びつけましょう。例えば、「キリストを知っていることは、私たちの神への従順にどのような違いをもたらすのでしょうか？」
8. 神、私たち自身、キリストにある救い、教会、世界などについて、その箇所が私たちに何を教えているのかを尋ねてみましょう。

はじめに



はじめに

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

大きな物語の中での位置付け

ピリピにあった教会は、パウロがヨーロッパで最初に開拓した教会であり、パウロにとって特別な意味を持ったところでした（使徒16:6-40参照）。最初の改宗者は紫色の品物を売っていたリディアであり、（4:2参照）。パウロとシラスは、占い師の奴隷の少女から悪霊を祓ったために投獄されたのですが、神が奇跡的に彼を救い出し、ピリピの看守に福音を宣べ伝えました。パウロは最初の出発の後、何度かピリピにいる人々を訪ねたようで、彼らは彼の宣教を積極的に支持し続けたのでした（4:15-16参照）。

パウロが獄中からピリピの信徒達へ手紙を書いたのは、エパフロディト（彼自身もピリピの信徒の一人）とともに送られたばかりの贈り物を受け取ったこともひとつの理由でした。しかし、この手紙はそのことに対する「感謝状」にはとどまらないのです。パウロは、エパフロディトが病気から回復した（2:25-30参照）という重要な知らせを伝えなかったのであり、エパフロディトを彼らに送り、やがてテモテ（2:19参照）も送れるかもしれないという希望を伝えなかったのです。テモテとエパフロディトが言及されている理由は、彼らがパウロがピリピの人々に望んでいたキリスト中心、そして福音中心の生き方の模範であったからです。


パウロはピリピの信徒たちの信仰を励ましたかったのですが、投獄されていたため、手紙を通してでしか連絡ができませんでした。そして処刑される可能性が迫る中、パウロは自分がまだ元気であることを教会に伝えなかったのです（1:12-18参照）。パウロはまた、ピリピの教会からの継続的な支援に感謝を表しています。当然、投獄されることは社会的に汚名を伴うものであり、この時点でピリピの人々がパウロに背を向けるのは簡単でした。しかし、教会の人々はパウロに忠実であり続けたのでした。

パウロにとっての一番の優先事項はペリピ人への手紙1:25に書いてあります(1:25参照)。当時、どうやら教会の信徒の中で少なくともユウオディアとシンティケとの間に何かしらの争いがあったことは疑いの無い状況のようです。(4:2参照)、しかしそのような状態を踏まえても、ペリピの信徒たちは比較的、健全な教会に属する会衆でした。そういう意味ではペリピの教会は、コリントやガラテヤの問題を抱えた教会とは対照的な人々でした。このように健全であるように見えるにもかかわらず、パウロは彼らもまた、すべてがうまくいっていると安心して気を緩めるべき理由はまだないと見ています。この世は危険に満ち溢れている一方、福音は栄光に満ち溢れているものですから、過去の成功に満足して立ち止まってはならないのです。(3:12-16参照) 彼らはパウロに倣って、「キリスト・イエスにあって神が上に召してください」という、その賞をいただくために、目標を目指して」走っているのです(3:14参照)。

この手紙の中でパウロは霊的な進歩とは一体どのようなものなのかを説明しています。クリスチャンにとっての成熟とは、一部の人にしか得られないような神秘的洞察や特別な悟りを通してではなく、愛を持って他者への奉仕し続けることなどの美德を忍耐強く実践していくことによりもたらされます。パウロは、自分自身をそのような生き方の模範として示し(1:12-18; 3:17; 4:9参照)、そしてテモテとエパフロディトもまた、同じような生き方の模範であるとして称賛しています(2:19-30参照)。パウロは、すべての信者が神の栄光を受けるには値しないことを理解しており、そのため自分自身が示す模範を超越した、最高の模範であるイエス・キリストを指し示しています。

この手紙の中心となるのは「キリストについての讃歌」だと言えます(2:5-11参照) イエスは、与えられていた神の栄光という特権を喜んで自ら手放し、しもべの姿を取られました。イエスは、この世を罪から解放するために、十字架という究極の屈辱を受け入れてくださいました。それゆえ、イエスは神のメシアとして最高の栄光を受けとり、この世界全体から賛美・礼拝されるようになりました。キリストを模範として彼に従う者達は、神もまた自分たちを贖ってくださるとい希望を持ち、それゆえに喜ぶことができます(1:18、3:1、4:4参照)。このため、信じるもの達は神がこの世において、人々が自分の努力で精一杯道を切り開かなければいけない状況に放っておかれることなく、必ず神が共にいてくださることを自信を持って確信することができます。霊的な進歩には努力が伴うものです、なのでパウロは「恐れおののいて自分の救いを達成するように努めなさい。」(2:12参照)と励まします。彼らがそうすることができる理由は、「神はみこころのままに、[あなたがたのうちに]働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」(2:13参照)と知っているからです。

**イエスは、
与えられていた神の栄光という特権を
喜んで自ら手放し、
しもべの姿を取られました**



テモテとエパフロディト

ピリピ人への手紙 2:19-30

ピリピ人への手紙2:19-30

テモテとエパフロディト

聖書箇所

ピリピ人への手紙 2:19-30

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

ピリピにいる信徒達が喜びをもって（自己中心ではなく）他者中心にへりくだって生きる上での動機はイエス（1-11節）とパウロ（2:16-17節）が示した模範によるものだけではありませんでした。パウロは、ピリピの信徒たちがすでに良く知っている二人のしもべ達を、キリストに似たしもべ的な謙遜の模範としてここで挙げています：

- **テモテ** (19-24節), は、教会のことを心から気にかけていました。
- **エパフロディト** (25-30節) は主のために二度も死にかけました。

テモテは、ピリピの信徒たちのことを心から気にかけています（20節）。これは自分のことだけ（4節）を考えないというキリストの模範に倣っているのです。通常、人は自分の利益だけを求めます（21節）。パウロの福音宣教の仲間であるテモテは、パウロにとって息子のような存在であり、パウロはテモテがピリピの人々に関する良い知らせを持ってパウロの元に戻ってくることを期待し、テモテをピリピの人々のところへ訪問させるつもりでした（19節）。

同様にもう一人の福音のパートナーであるエパフロディトも、キリストに似た他者中心とした福音の奉仕の模範でありました。このためパウロは彼をピリピへと既に送っていました。エパフロディトとの間にある福音の一致と協力関係の意識をパウロは強く持っていました。そのためエパフロディトを「兄弟」、「同労者」、「戦友」、「使者」、「奉仕者」と一節の中で述べています（25節）。パウロのエパフロディトに対する愛情は強く、彼の死の可能性に直面することは「悲しみに悲しみを重ねること」（27節）をもたらすものでした。

クリスチャンには、神に倣った自己犠牲について、聖書の教えが必要です。またキリストに信仰と希望を置き模範となる人々の存在も必要です。イエスは謙遜な奉仕において一番の模範です。しかし、パウロがテモテやエパフロディトを推薦するように、神の恵みに感謝して生き、謙遜で犠牲的な奉仕の模範を示している人たちを、私たち自身の周りにも探してみましょう。テモテやエパフロディトのような人は、尊敬され（29節）、称賛され、宣教のために解き放たれるべきです（19、25、28節）。キリストのために生きることは簡単ではありません。へりくだりと奉仕、そして神の恵みに頼ることが必要だからです。

観察と意味

1. パウロはなぜテモテをピリピの信徒達の教会へ送ろうとしたのでしょうか（2:19）？パウロはテモテをどのように評価していましたか（2:20）？テモテとピリピの教会はどのような間柄にありましたか（2:20）？パウロから見て、なぜテモテは際立った存在だったのでしょうか（2:21-22）？

使徒が彼の二人の同僚について述べたことは、パウロとピリピの教会の人々とのこれまでの関係性、現在、そしてこれからの関係性についての詳細を補って説明しています。そして、このことはまた、他者を第一に考えることの実践的な例としても機能しています。

2. パウロはいつ、テモテをピリピの教会へに送り出すつもりでしょうか（2:23）？なぜパウロはピリピの教会の人々を再訪できると確信していたのでしょうか（2:24）？
3. エパフロディトとはどのような人ですか（2:25）？ピリピの人々はなぜエパフロディトをパウロの元へ送りましたか（2:25）？エパフロディトは、ピリピの友人たちのことをどう思っていましたか（2:26）？エパフロディトに何が起こりましたか（2:26-27）？神はどのようにしてパウロが大きな悲しみを免れるようにされましたか（2:27）？

ピリピ出身のエパフロディトもまた、真のクリスチャン的な愛の模範となる人だと言えます。彼は、パウロがピリピの人々を慕っているのと同じように、彼も心からピリピの人々を慕っており（1:8; 4:1）、神がそんな彼を重い病気から救ってくださったことを熱心に伝えていきます。死んでキリストのもとにいる方がはるかに良い（1:21）にもかかわらず、神はエパフロディトの命を救い、憐れみを示されました。クリスチャンは、仲間のクリスチャンが亡くなった時も、キリストの御許に向かったと確信することができますが、たとえそうであっても、そのような時には悲しみに悲しみが重ねる様を感じることは間違ったことではありません。

4. パウロはどのように無私の心を示しましたか（2:28）？ピリピにいる信徒たちは、エパフロディトをどのように迎え入れるように言われましたか（2:29-30）？なぜピリピの人たちは、自分たちがパウロへ送った使者を尊敬するように言われたのでしょうか（2:30）？

ここでエパフロディトがキリスト的な人であるということは、パウロの慎重な言葉選びによって強調されています。キリストは「死にまで」従順であった（8節）と述べたパウロは、今度はエパフロディトが「死ぬほどの」（27節）と言い、もう少しで死ぬばかりになった（30節）と書いています。どちらの場面でも、パウロは同じギリシャ語（メクリ・タナトス）の言葉を用いています。

ピリピの教会は、パウロを支援するために贈り物を送ることを望んでいましたが、エパフロディトが実際に行動するまでこのことは実現しませんでした。彼はピリピの信徒達に代わって、この困難に立ち向かったのです（ピリピ4:10, 18参照）。

適応

- 他のクリスチャンが、あなたのことを心から心配してくれたことによって、あなたが受けた影響はありますか？
- イエスはへりくだった奉仕の第一の模範となる方です。しかし、テモテやエパフロディトのように、模範となる男女は現在も私たちの周りにはいるはずで、謙遜で犠牲的な奉仕の模範となるにはどうしたらよいのでしょうか？
- パウロは、エパフロディトの死が「悲しみに悲しみを重ねる」（27節）だろうと言うほど、彼との協力関係を強く意識していました。教会内での友情はすべて平等であるべきなのでしょうか？教会の中において、人によって友情の深さが違っていてもいいのでしょうか？あなたの答えを説明してください。



キリストへの信仰による義

ピリピ人への手紙 3:1-7

ピリピ人への手紙 3:1-7

キリストへの信仰による義

聖書箇所

ピリピ人への手紙 3:1-7

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方のみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロはこの箇所で、まずピリピの人々に主にあって喜ぶように呼びかけ（1節）、次に福音に反対するユダヤ人について警告しています（2-3節）。福音を自分自身に適用する際に最大の妨げの一つは、どうしても自分自身の持つものに依存してしまう人間としての傾向です。この箇所でパウロは、自分の義を人間的な能力に頼ることを否定しています。「肉体だけの割礼」、「犬」（2節）とは、割礼が救いに必要だと教えるユダヤ人たちのことを示しています。

パウロは、自分自身が「肉において頼れるところがある」（4-6節）理由を挙げていますが、信仰によって神から与えられる義（8b-9節）に比べれば、これらの自分の行いで勝ち取った戦利品はゴミ同然だと（7-8a節）と主張しています。パウロは、自分の功績を誇るのではなく、そのようなものをすべて失うことによってキリストを「得る」のだと言います。パウロの救いは、自分の業績からではなく、救い主の与えてくださるもの以外には何も頼るものがないことから来るのです。

パウロのアイデンティティ

パウロは彼の宣教でのさまざまな場面において、自分の持つアイデンティティの違った側面を強調しました:

- ユダヤ人
- クリスマン
- ギリシャ文化に属する
- ローマ市民

パウロがローマの千人隊長へ自己紹介をした時、「私はキリキアのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です」と典型的なギリシャ的都市部に住む人がするような語り口でした（使徒21:39）。この手紙の3章では、パウロは自分のユダヤ人としてのアイデンティティを弁明しています。彼は若い頃をエルサレムで過ごし、パリサイ派の教師から聖書を学びました。また、彼はユダヤ人として生まれたので、異教徒からユダヤ教に改宗した者でもありません。

ピリピの地で投獄された後、パウロがローマ市民であることを公言していたので、ピリピ教会はパウロがローマ市民であることを知っていました（使徒16:37-38参照）。興味深いことに、パウロは自身の書簡の中ではローマ市民であることを一度も語っていません。

パウロは手紙の中で、自分のアイデンティティの一部をあえて伝える必要を感じなかったようです。恐らく、彼がローマ市民であることは既に聴衆に知れ渡っていたからかもしれません。もっと可能性が高いのは、自分に有益な時（つまり、政治的場面で必要となる時）にだけこのアイデンティティを用いたからでしょう。パウロは生まれながらにしてローマ市民であり（使徒22:28参照）、それはパウロが生まれる前に、父親か前の世代の家族が市民権を得ていたことを意味します。市民権は、ローマ国家に提供された価値ある奉仕に対する報酬である可能性があります。パウロの家族は、紀元前1世紀半ばのローマ内戦の間、タルソ周辺で活動していた多くのローマ軍の一部に宿泊用のテントを提供していた可能性があります。そのような貢献は市民権を与えられるのに十分な理由となったでしょう。ローマ市民権を持つと、選挙権、税金の免除、法的保護などの特権がありました。

**福音を自分自身に適用する際に
最大の妨げの一つは、どうしても
自分自身の持つものに依存してしまう
人間としての傾向です。**

観察と意味

1. パウロは信者達に何をすることを求めたのでしょうか (3:1) ?
なぜパウロはピリピの信徒たちに本質的な真理であることを繰り返して伝えたのでしょうか (3:1) ?

パウロはこの喜び（主にあって喜ぶこと）のテーマを手紙の4章で再び取り上げます。しかし、その前にパウロはユダヤ教的な慣習を持つユダヤ教主義者達のことについてに言及する必要がありました。

2. パウロはある偽教師達を何と呼びましたか (3:2) ?
3. パウロは誰を“本物”として扱いましたか (3:3) ?

パウロはユダヤ教主義者達たちを批判し、真の教会の対照的な特徴を説明しています。「犬」という言葉は、古代世界では一般的な蔑称であっただけでなく、一部のユダヤ人が汚れた異邦人を指して使った言葉でもありました (2節)。このためパウロは皮肉を込めて、このレッテルに値するのは実はユダヤ人達であって異邦人ではないと言っているのです。パウロの皮肉はさらに続き、律法的の良い行いを推奨する人々を、悪を行う者、肉に頼る者としています。ユダヤ教的な人たちが誇りとしている印は、彼らの破滅の印なのだと言っているのです。

肉体的な割礼を勧めている人々 (2節) とは対照的に、本当の神の民は神の霊によって礼拝する人々です (ヨハネ4:23-24参照)。彼らはイエス・キリストにあって栄光を現し、肉なることには頼りません。(ピリピ人への手紙1:26参照)

4. パウロは自身についてどんなことを自伝的に書いていますか (3:4-6) ?

パウロがユダヤ教主義者達に反対したのは、ユダヤ人の『血筋』がなかったからではありませんでした。パウロは申し分のない家柄の出身でした。パウロが反対した理由は、福音に関することでした。

適応

- 福音を自分自身に適用する際に妨げとなるのは、自分が正しさを現す「義」の実感を得るために、自分の能力や行いに依存する傾向があることです。自分の行ったこと、その業績に自信を持ちたくなるのはどんな時ですか？
- 自分の業績に自信を持つことによって生じる危険にはどのようなものがあると思いますか？
- 自分の能力や業績に自信を持ちすぎているかもしれない信仰者を、仲間としてあなたならどのように助けますか？



完全な満たしがある

ピリピ人への手紙 3:8-11

ピリピ人への手紙 3:8-11

完全な満たしがある

聖書箇所

ピリピ人への手紙 3:8-11

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロは、キリストにあるということ、キリストご自身をよりよく知り、その復活の力を知ること、またキリストの苦しみ（10節）と死を分かち合うこと（コイノニア）を目指しています。この苦しみを共有する、ということは、「復活」を獲得するための条件ではなく、共有することで次のことを可能にするのです：

- キリストとの結びつきをより深くし、
- キリストに新たな命を与えた神からの力を体験し、
- 復活のために、そして私たちのために、計り知れない痛みに耐えなければならなかった救い主の愛をより深く理解することができるようになります。

福音に照らして自分の人生を振り返るとき、私たちは自分の犯した罪だけでなく、神の前で自分を正当化するために利用してきた行いの実績についても悔い改めなければならないことに気がつきます。このことによって私たちは、私たちの罪のために天の栄誉を捨てて、苦しめられた復活の救い主と、より深い一致を持って結ばれることになるのです。神の義は、キリストを信じる信仰によってのみ、与えられます（9節）。神は私たちに、恵み（ピリピ人への手紙1:7）だけでなく、キリストの苦しみ（10節）も分かち合うように、交わり（コイノニア）へと招いておられます。

それは、私たちが神の愛の偉大さと復活の力を理解するためなのです。私たちはパウロが語るように、自分の人生の功績を『ちりあきた：値打ちのないゴミ』だと言えるでしょうか？キリストにあって、私たちはそのようなことが言えるだけでなく、この世でどんなことに直面しようとも、復活の大いなる不思議が私たちのものであることを発見することができます。福音の下での生活には、私たちの道徳的な意味での履歴書（悪いものだけでなく、良いものも含めて）を拒絶することが含まれます。イエス・キリストがすべてなのです。イエス・キリストだけが『全てに勝る価値』を持っておられるのです」（8節）。

観察と意味

1. パウロは、自分の成し遂げたことに目を向ける時、どのような意味でそのことを誇っていなかったのでしょうか（3:7-9）？なぜパウロは自分のかつての功績を「ごみ」と見なしたのでしょうか（3:8）？

この得と損という表現は、イエスの教えを暗示しています（マタイの福音書16:25-26参照）。パウロが以前は「得」（自分の権力、名声、従順）になることとして、理解してきたものを、今は「損」になるものとして見ているのです。同様に、十字架につけられたメシヤ（以前パウロが『損』だと思い込んでいた方）は、今や究極の『得』と見なされています。

2. キリストにあるパウロの地位はどのようなものだったのでしょうか（3:9）？

パウロが「キリストにある者と認められるため」（9節a）と述べているのは、キリストと霊的に結ばれ、神の前で有罪とされないことを指しています。以前パウロは、（イエス・キリストを信じる信仰によって得られる）神の前での正しい立場ではなく、（律法への従順に基づく）行いによる自分自身の義を信じていました。神は、キリストを信じる者に、キリストの完全な従順の実績を与えられます。人間はみな必ず罪を犯すので、義は律法を守ることで得られません（ローマ10:1-8参照）。従って、神の前に正しい立場に立つことは、キリスト（神の前にあって信者達の義である方）を信じる信仰によってのみ可能となるのです。

3. パウロはピリピにいる信徒に対して、どのような切望を抱いていることを明らかにしていますか（3:10-11）？パウロはどのような希望をここで語っていますか（3:11）？

適応

- あなたはパウロのように、自分の成し遂げたことを「値打ちのないゴミ」だと言えるだろうか？自分の業績をこのように考えることが難しいのはなぜですか？
- キリストの完全な従順があなたに『与えられた』という事実は、神のあなたに対する見方をどのように変えますか？
- この同じ真理は、あなた自身を見る目をどのように変えますか？



目標に向かい身を伸ばす

ピリピ人への手紙 3:12-15

ピリピ人への手紙 3:12-15

目標に向かい身を伸ばす

聖書箇所

ピリピ人への手紙 3:12-15

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロは天にある国籍（ピリピ3:20）の表現に戻り、私たちがいつか見ることになるキリストの完全な支配と義を描こうとしています。この将来にある栄光は、パウロが手に入れようと「前のものへ向かって身を伸ばしている」のです（ピリピ3:13-14）。パウロは後ろにあるものを忘れ、前にあるものに向かって努力し、天にある賞に向かって突き進んでいます。

**神は私たちに望むものすべてを
与えるわけではありません、しかし、
神は約束を必ず果たしてくださいます。
— 私たちを最善で最もまっすぐな道へと
導いてくださるのです。**

ディートリヒ・ボンヘッフアー

観察と意味

1. パウロの語る証しとは何についてでしたか (3:12-14) ? パウロの霊的生活は、どのような点でランナーの鍛錬に似ていると思いますか (3:12-14) ?

パウロは、自分は未だに完全な存在ではないことを強調しています。彼もまた墮落した世界での人生における葛藤に巻き込まれているのです。つまり、彼は未だに罪を犯す人であるということです (復活の完全な栄光が表されるのは、未来の話なのです)。しかし、パウロは、イエス・キリストがパウロを自分のものとしてくださったのだから、この真理を自分のものとするために前進し続けるのです。人によっては既に永遠の命が保証されているなら、キリストに仕える生活を忍耐強く続ける必要はない、と主張するかもしれません。しかし、パウロはここで、私たちが耐え忍び続ける動機はただ「キリスト・イエスが私を捕らえてくださった (自分のものとされた)」からだと示しています。

2. パウロは過去をどう捉えていましたか (3:13) ? パウロの目標は何だったのでしょうか (3:14) ?

パウロの人生には目的があり、常に天にあるゴールを目指しています。その賞とは、来るべき時代における祝福と報酬で満たされること (特に、永遠にキリストとの完全な交わりにあることによって) なのです。

3. パウロはピリピの信徒たちに、自分の考えを共有するようにどのように呼びかけましたか (3:15) ? パウロは、自分と意見の異なる信者たちに何を願いましたか (3:15) ?

パウロが「大人」と書いている箇所では、前に「完全」と訳されていたのと同じ形容詞を使っています (3:12)。パウロはこう言っているのです。「もしあなたが本当に完全で成熟した大人なのであれば、あなたは自分がまだ完全でも成熟もしていないことを知っているはずですよ!」と。

適応

- パウロは、忍耐する動機が「キリスト・イエスが私をご自分のものとされた」からに他ならないことを示しています。これはいったい何を意味するのでしょうか? パウロがキリストのものであるという確信が、天に向かって「身を伸ばす」動機となるのはなぜでしょうか?
- あなたはキリストのためにどのようなレースを走っていますか? どんな賞を狙っていますか? クリスマンとして生きようと奮闘しているとき、どのような困難に直面しますか?
- キリストのようになるという目標に向かって突き進むために、どのような方法で決意を新たにできると思いますか?



倣う者となる

ピリピ人への手紙 3:16-21

ピリピ人への手紙 3:16-21 倣う

聖書箇所

ピリピ人への手紙 3:16-21

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロはピリピの信徒たちに、彼に倣い（3:17）、また彼の模範に従って歩む者たちにも倣うことを望んでいます。『倣え』という呼びかけは、パウロの手紙に共通するテーマと言えます。パウロの意図は、ピリピの人たちがパウロ自身に注目することではなく、パウロと一緒にあってへりくだり、そして大胆にキリストにより頼むことなのです。

しかしパウロは、多くの人々が十字架の敵であることを涙ながらに指摘している（3:18）。彼らは地上のことに心を置き（3:19）、キリストの再臨を待ち望んでいないからです（3:21）。彼らの終末は滅びです（3:19）。これが、福音によって心が変わえられないすべての人の運命なのです。キリストに属する者として、私たちは地上で安住しすぎではないのです。また、地上の快樂に惑わされてはいけません。私たち信仰者の国籍は天にあり、キリストが高く上げられたところにあります（ピリピ2:9-11）。パウロとともに、私たちは天にある賞に向かって熱心に努力するのです。

**クリスチャンとしての成長は、
しばしば他のクリスチャンに倣うことによってもたらされます。**

観察と意味

1. パウロはピリピの信徒たちに何を訴えたのでしょうか (3:16) ? パウロは信者にどのような形で自分を模倣してほしいのか (3:17) ?

パウロはまだまだ完全な存在ではありませんが、自分のクリスチャンとしての歩みに十分な確信を持っているので、ピリピの信徒たちに自分や他の成熟したクリスチャンに倣いにその歩みに加わるように求めたのです。クリスチャンの成長は、しばしば他のクリスチャンに倣うことによってもたらされます (ピリピ4:9、1コリント11:1、2テサロニケ3:8-9、1テモテ4:12、15-16、2テモテ3:10-11、ヘブル13:7、1ペテロ5:3参照)。

2. パウロは神の敵のことをどのように描写していますか (3:18-19) ?

十字架の敵とは、ユダヤ教主義者たち (3:2) 、あるいは「この世的な」人々全般のことを指しているようです。彼らの運命は最後の審判 (と滅び) です。そのような人々は、自分自身 (の腹) の欲望を崇拜し、地上のことで頭がいっぱいになっています。

3. ピリピのクリスチャンたちはどこに市民権を持っていましたか (3:20) ? ピリピの信徒たちは誰を待ち望んでいましたか (3:20) ?

ピリピの町はローマの植民地であり、ローマ市民権という荣誉と特権が与えられていることを誇っていました。パウロはピリピの信徒たちに、自分たちの行動の模範をカイザルではなく、キリストに求めるように戒めています。彼らは互いに、またパウロと共に福音のために立ち向かう必要があるのです。

4. 天の国民の特徴は何だと思えますか (3:21) ?

キリストの示した奉仕の模範に従う者は、キリストの^{あがな}贖いとその栄光を分かち合うこととなります。完成は復活の時にもたらされるものなのです (ピリピ 3:11-12、1コリント15:12-28参照)。

適応

- あなたは成熟した信者たちが共に「堅く立つ」のを目にして、真似して自分の生活の中にも取り入れてきたことはありますか？パウロの生き方や模範はどのように真似ることができると思いますか？
- イエスを待つことに疲れてしまう原因は何だと思えますか？あなたはどのような時に、地上のことに心を奪われがちになりますか？
- 自分がこの地上ではなく天に国籍があることを知ることは、あなたにどのような影響を与えますか？あなたが天国にたどり着くずっと前に、神様はあなたを天国の国民としてくださるということは、神様があなたに対してどのような態度をとっておられることを示していますか？



励ましの言葉

ピリピ人への手紙 4:1-9

ピリピ人への手紙 4:1-9

励ましの言葉

聖書箇所

ピリピ人への手紙 4:1-9

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロは続けて福音を適用について書きます：

- 第一に、二人の宣教のパートナーたちに対して
- 第二に、ピリピの教会全体に対して

宣教のパートナーであるエウオディアとシンティケは、主にあって一致する必要がありました。彼らの間にある不一致は、パウロが手紙の中で先に概説したクリスチャンとして奉仕とへりくだりについての模範とは矛盾するものでした（ピリピ2:1-11参照）。パウロは喜びと一致についての教えを続け、新たに喜ぶように呼びかけている（4:4）。喜ぶべき理由は、主の臨在が近くにあるからです。神は、しばしば信者の中や信者の間に緊張を生み出す不安を、次のような方法で克服されます：

- **請願**の祈りと
- **感謝**の祈りによって
- 神にある全ての理解を超えた**平和**が与えられます(4:7)。

次の聖書箇所（4:8-9）は、福音の中で尊く、清く、愛すべきものすべてを黙想するようにとの戒めです。

私たちの属するクリスチャンコミュニティは、一致と喜びという特徴を持つものであるはずで、人間関係の不和や満たされない不安は、私たちのコミュニティから喜びを取り去るかもしれません。私たちの間に神がおられるということは、私たちが感謝し、祈り、平安な心を育むことができるということです。

観察と意味

1. パウロはピリピの信徒たちに対してどのように感じていましたか（4:1）？パウロはピリピの信徒たちに何を勧めていましたか（4:1）？
2. なぜパウロはユウオディアとシンティケに嘆願したのでしょうか（4:2）？なぜパウロは公に彼女たちのことを書き人々の注目を集めたのだと思いますか（4:2）？なぜパウロはピリピの教会内の一致についてこれほど心配しているのでしょうか？「主にあって同じ思いになる」とはどういう意味でしょうか（4:2）？ユウオディアとシンティケは、過去にパウロをどのように助けたことがありましたか（4:3）？彼らの名前がいのちの書に記されているのは、なぜでしょうか（4:3）？パウロとクレメンスとの関係はどのようなものでしたか（4:3）？パウロは「真の協力者」をどのように頼りにしていましたか（4:3）？

パウロはユウオディアとシンティケの間にある緊張関係の原因をここでは明らかにしていません。その代わりに、先に述べた原則を適用するように勧めています。「一致」（4:2）と「同じ思いである」（ピリピ2:2）はギリシャ語では同じ言い回しです。

和解にはしばしば第三者の介入が必要です。この場合は「真の協力者」の助けが必要です。パウロがユウオディアとシンティケの和解を熱望しているのは、彼らが「福音のために」パウロと「肩を並べて」働いてきた人たちであるからです。手紙の前半において（ピリピ1:27）、パウロは福音のために『共に戦っている』人々の間の一致を勧めています。パウロは孤立して一人で宣教していたのではなく、意図的に他の人々と協力していました。1世紀当時の文化から考えると、ユウオディアとシンティケは女性に向けて宣教していたと思われます。『いのちの書』とは、神に属する人々に関する神の記録のことです。

3. パウロは読者に何をどのように勧めていたのでしょうか（4:4）？

パウロはピリピの信徒たちに喜びがあり、また寛容な態度であることを呼びかけ、不安を期待と感謝の祈りに置き換えるようにしています。パウロは、クリスチャンが美德とすることについて考え、実践するように呼びかけています。

4. パウロはピリピのクリスチャンたちに、他の人々に対してどのように接するように伝えましたか（4:5）？キリストの再臨が間近に迫っていることを意識することは、人々の心構えと振る舞いどのような影響があるのでしょうか（4:5-7）？パウロは思い煩いについて何と言っていますか（4:6-7）？ピリピの人たちは、心配する代わりに何をすべきでしょうか（4:6-7）？

寛容であることは、コミュニティを維持するために極めて重要です。寛容であることで自分だけのためではなく、皆にとって何が最善かを追求するようになります。パウロが「主は近いのです」と書いているのは、イエスが必ず再臨し、人々を裁き、その行いの責任を問うという事実を強調しているのです（ヤコブ5:9参照）。パウロは、山上の説教（マタイ6:25-34参照）におけるイエスの教え、すなわち、信者は心配することなく、愛する天の父の御手に身を委ねる、キリスト・イエスにある平和が守ってくださるようすべきであるという教えをそのまま受け継いでいます（4:6-7）。パウロが「守る」という単語を使っているのは、彼が投獄されていたこと、あるいはピリピがローマの植民地で軍の駐屯地があったことを反映しているのかもしれませんが、いずれにせよ、本当の意味で信者を守るのはローマ兵達ではなく、神にある平和なのです。神は主権者であり、支配者であるからこそ、クリスチャンはすべての困難を神に委ねることができるのです（ローマ8:31-39参照）。

5. 健全な思いの特質とは何でしょうか（4:8）？ピリピの信徒たちは何を実践すべきでしたか（4:9）？

ピリピの信徒たちは、神への礼拝と他者への奉仕を促すようなことによって、自分の心を満たすことを勧められています。そして、パウロが行っていることを実践することです。そうすることによって、単に神にある平和だけではなく、平和の神が彼らとともにいてくださることを知ることになります。

適応

- 普段、どのようなことに心を奪われがちですか？そのようなことに夢中になっていると、人間関係にどのような影響があると思いますか？特に、それはあなたの持つ喜びにどう影響しますか？
- 不安を感じる時、気分を良くするために何をしますか？パウロが述べているような平和のために、祈りと自分の思いを用いて戦うことは、あなたにとって何を意味するでしょうか（イエスというお方、その御業が、あなたにとってどのような喜びであるかを考えてみてください）。
- 現在、あなたの心の内で大きな位置付けのあるものの中で、あきらめるべきものは何でしょうか？また、そのことに代わるものは何でしょうか？私たちは今、これらの心配事のためにどのように祈ることができるでしょうか？



神の与える備え

ピリピ人への手紙 4:10-20

ピリピ人への手紙 4:10-20

神の与える備え

聖書箇所

ピリピ人への手紙 4:10-20

主要な目的

ピリピ人への手紙の主要なテーマは励ましです：パウロはピリピに住む信徒たちが、天国へ移住する市民として、この世での生活を送れるように、彼らを励ましたいのです。この生き方が出来ているかどうかは、神に仕え、またお互いに仕えることへの決意の深まりによって証明されるものです。パウロが勧める生き方とは、イエス・キリストの生き方にのみ現されているものではなく、パウロ、テモテ、そしてエパフロディトの生き方にも現れています。

概要

パウロはこの手紙を締めくくるにあたって、困難にもかかわらず喜ぶというテーマにまた戻ってきました（4:10）。ピリピの信徒たちがパウロを気遣ってくれることに励まされてはいるが、パウロの満足は別のところにあります。彼は満ち足りることを見出すために、教会の支援に依存しているのではないのです（4:11）。彼は福音がもたらす一致を喜び、へりくだることを強調します。パウロは豊かさと貧しさの両方に向き合う秘訣を学んできました。クリスチャンとしての私たちが受けれる心の満たしも同じです。パウロは、私たちが多くのもを持っていようが、少ないものを持っていようが、自分の置かれた境遇の向こう側を見渡し、キリストを喜ぶようにと教えています。キリストにあって、私たちは必要なもの、望むものをすべて持っているのです。パウロは福音による謙遜の中にある喜びと実りを悩めるピリピの教会の中心に置いているのです。このパウロによる手紙は最初から最後まで、恵みへ戻るようにとの呼びかけなのです。

恵みを：

- 受け取ること
- 休息すること、そして
- お互いの人生に関わる中で一緒に用いること

観察と意味

1. パウロはなぜ喜んでいたのでしょうか（4:10-13）？パウロは満足についてどのような教訓を学びましたか（4:10-13）？なぜパウロはどんな境遇にも対処することができたのでしょうか（4:10-14）？

パウロはピリピの人たちの支えにとっても感謝していますが、その一方で彼がどんなに困難な状況にあっても、満足することを学んだことを知ってほしいと願っています。人生の困難の中で生きる秘訣は単純で、『私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできる』と言えるように神を信頼することです。この言葉は、その人が何をしようと神は祝福してくださるという意味として捉えるのではなく、神への従順と他者への奉仕を強調したこの手紙の文脈の中で理解され、読まれなければなりません。

2. ピリピの人々は、パウロの向き合う困難に対してどんな行動をしましたか（4:14）？パウロはピリピの信徒たちに対してどのように感じ、なぜそのように感じたのでしょうか（4:14）？ピリピの信徒たちは、これまでパウロをどのように支えてきましたか（4:15-16）？

ピリピの信徒たちは、霊的な面だけでなく、経済的な支援という実生活の面でも、パウロの働きを分かち合っています。彼らは、パウロがマケドニヤを去った後も（4:15）、テサロニケにいた時も（4:16）、パウロの働きに貢献してきました。

3. パウロが彼らに求めていなかったものは何ですか（4:17）？またパウロはピリピの人々に求めていたことは何だったのでしょうか（4:17）？パウロの当時の経済的事情はどのようなものだったのでしょうか（4:18）？パウロはピリピの信徒たちの寛大さにどのように答えましたか（4:18-19）？神は信者たちの寛大さにどのように応えられると思いますか（4:19）？

パウロはピリピの人たちの贈り物によって十分に支えられ、この贈り物が福音の奉仕のために差し出されたものであるため、古代イスラエルの民の礼拝の姿の話にまたつながります。この贈り物は、『香ばしい香り』がして、『神が喜んで受けてくださる捧げもの』なのです。旧約聖書に出てくる、直接的な意味での捧げ物はキリストの到来によって取り除かれましたが、根本にある神への犠牲的な献身の原則は残っています。神に対して寛大な人は、神が寛大であり、（キリスト・イエスにあって）あらゆる必要を満たしてくださることを知ることになります。

4. パウロは誰に感謝と賛美を捧げていますか（4:20）？ピリピの信徒達へ手紙の締めくくりの挨拶を送ったのは誰でしたか（4:21-22）？パウロは手紙の終わりに何を強調して書いていますか（4:23）？

「キリストについての聖歌」（ピリピ2:5-11）が「父なる神に栄光を帰するため」で終わっているように、パウロはこの手紙を「私たちの父なる神に、栄光が世々限りなくありますように アーメン』という頌栄で結んでいます。聖徒たちひとりひとりによるしく伝えてください。にという勧めは、このパウロの手紙が個人的に知っている人達へのものであることを示すものであり、また実際に現実世界に存在する人々が手紙に応答することを願って書かれたものであることがわかります。

適応

- ピリピ人への手紙を感謝の手紙だと考えている人は少なくないかもしれませんが。しかし、パウロはピリピの信徒たちとの協力関係に感謝することはありませんでした。むしろ、彼らの心遣いを「主にあって喜んだ」と述べています。このことは経済的援助に対するパウロの見解を教えてくださいませんか？ピリピの人々が、パウロが自分の必要を軽減してくれたことが喜ぶ理由ではないことを知ることが、なぜ重要なのでしょうか？（パウロは何のために喜んでいるのかを考えてみてください）
- パウロが感じたような満たしを、あなたが感じられないのはなぜだと思いますか？神が「キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください」とは実際にはないかのような生き方をしているのはどんなときでしょうか？

- あなたはこれまで神がどのような備えを与えてくださったのを目にしたことがありますか（それは身体的、霊的、あるいはその他のことかもしれません）？神の寛大さを「栄光の内にある豊かさ」と考えることは、あなたにどのような影響を与えますか？神がイエス・キリストにあって人々に供えを与えて養っておられることを思い起こすことは、あなたにどのような影響を与えますか？あなたの人生における神の備えを認識することためには何をすべきでしょうか？このことによって、自分自身や自分の置かれている境遇について、どのように考え方が変わるのでしょうか？

**あなたの人生にも
神は問題を抱えている人を
送られていませんか？
あなたがその人たちと
共にいて、彼らに心配するためには
何をすべきでしょうか？**

<https://www.gracecity.jp>

